

歴史の伝承と建築における装飾

中川 萌生

1 はじめに

本研究調査報告では、アウクスブルク市の建物や教会から、建築技術や装飾について学び、どのような歴史的背景や文化があるのか、ということについて論述している。

日本の建物と西洋の建物の作りが違うことは言うまでもなく、その背景にある歴史や文化を知る手掛かりになるのではないかと考えている。2000年の歴史を持つアウクスブルグ市から、建築という言葉キーワードに歴史や文化を知る一つのきっかけになるよう願っている。

まず初めに、本研究調査報告書では、今回の派遣にて実際に訪れた場所を上げて紹介していく。様々な場所に視察に行ったが、その中でもひと際歴史について知ることができる、ノイシュヴァンシュタイン城をあげて先に挙げた問いに迫っていく。ノイシュヴァンシュタイン城は滞在4日目に訪れた荘厳な城で、中の装飾には数々の宝石が使われていたことが印象的だった。どこから見ても美しく、歩いて15分ほどのところにある橋から眺めるノイシュヴァンシュタイン城と、城の近くで眺めるノイシュヴァンシュタイン城は全く違う顔を持っているような印象だったことを今でもはっきりと覚えている。



徒歩 15 分の橋から見たノイシュヴァンシュタイン城

2 ルートヴィッヒ二世

内装や装飾について記述する前にノイシュヴァンシュタイン城を建てたオットー・ルートヴィッヒ・フリードリッヒ・ヴィルヘルム（以下ルートヴィッヒ二世）について概要をまとめたいと思う。



(左) ルートヴィッヒ二世

(右) 近くから見たノイシュヴァンシュタイン城

国王一家はアルゴイ地方のフュッセンの街の郊外にあるホーエンシュヴァンガウ城で過ごすことが多かった。その一方で父とルートヴィッヒ二世が共に過ごす時間は少なく、彼への教育は厳しく禁欲的なものであった。そして父が突然死したことでルートヴィッヒ二世は、始めたばかりの勉学の中断を余儀なくされ、国王の座に即位しなければならなかった。彼はそのような状況の中でも、国政に真摯に取り組み民衆から信頼を得ていた。彼自身結婚については考えていなかったが、周りの声と将来のために血のつながっているゾフィーと婚約する考えに至る。しかし婚約期間が長すぎる故、彼女の父に早期結婚を迫られ婚約破棄になってしまう。ルートヴィッヒ二世はこの一連の出来事がきっかけで国政をおざなりにしてしまい、趣味に生きるようになってしまう。

ここまでは、ルートヴィッヒ二世が婚約破棄に至るまでの流れを私なりに簡潔にまとめたものである。ここからルートヴィッヒ二世の性格や心情を読み取ることができるのではないだろうか。

彼が戴冠マントを受けとった時点での年齢は20歳である。まさに様々な経験をして見聞を広げ、自身の価値観を豊かにする学生時代の真ただ中に、国政に努めるのは考えられないほどの責任と時間の拘束があるに違いない。もし、結婚問題や婚約破棄がなければ、彼はこのまま国政に真摯に取り組んでいたのだろうか。生涯にわたって国のことを考え続ける人生となったのだろうか。誰も知る由のない未来を考えては彼の生きづらさに憐みの気持ちが湧き出て

くる。続いて趣味に生きるようになったルートヴィッヒ二世だがどのような趣味に生きたのか見ていきたい。

婚約破棄後、ルートヴィッヒ二世は芸術と音楽に没頭するようになる。ノイシュヴァンシュタイン城、ヘレンキームゼー城、リンダーホーフ城の3つの城の着工に着手する。ノイシュヴァンシュタイン城は中世騎士の理想を表したお城、ヘレンキームゼー城はヴェルサイユ宮殿に倣ったお城、そしてリンダーホーフ城は私的な隠れ家として利用されていたお城である。晩年には精神状態が悪化したことが原因で王位を剥奪されてしまう。そしてシュタルンベルク湖にて医者とともに謎の死を遂げていたそう。死因についてはわかっておらず、自殺か、他殺か、事故死なのか、様々な説が出ている。生前ルートヴィッヒ二世は「私が死んだらこの城（ノイシュヴァンシュタイン城）を破壊せよ」と遺言していた。それは彼が城を自分の世界の中だけに留めたいという思いからきた願いだったが、その願いはかなえられず、地元の住民に開放することで観光資源となった。現在でも文化財として保全されバイエルン地方随一の観光資源となっている。



ヘレンキームゼー城



リンダーホーフ城

ルートヴィッヒ二世の死が未だわからないからこそ、謎に包まれた城とルートヴィッヒ二世の存在が魅惑的なもののように見える。城を3つ建てることで国の予算はどんどんなくなり底をついていたのではないだろうか。退位もこじつけなのだとしたら暗殺や他殺が有力な説なのではないかと考えるが医者が同行していたことから、共犯である可能性もぬぐい切れない。ルートヴィッヒ二世の願いであった「城を燃やして破棄する」ということが実行されなくて本当に良かったと、視察に行つて強く思う。もちろん観光資源として大切なスポットであることに間違いはないが、彼の歴史を、この町の当時の状況を、荘厳で綺麗なお城を残しておけたことは、後世にとって何よりの財産なのではないかと思う。

3 ノイシュヴァンシュタイン城

ここからは、先ほどのルートヴィッヒ二世についてのことを踏まえたうえで、よりノイシュヴァンシュタイン城という城に焦点を当てていきたいと思う。驚くことに、ノイシュヴァンシュタイン城の下絵は画家

が描いている。より詳細で技術的な構図は建築家が描いているのだが、最初の構想や下絵は画家が想像を働かせて描いていた。ルートヴィッヒ二世が、いかに芸術を好んでいたかということが分かるのではないだろうか。そして建築される際には当時の最新技術であった蒸気クレーンも使用されていた。ここで建設労働者のためにバイエルンで最初にあたる社会保険が導入された。最新技術の導入と社会保険の導入はこの町に大きな技術と革新をもたらしたのではないだろうか。

続いて上部宮殿中庭についてだが、ここはオペラ「ローエングリン」第二幕をモデルにしているといわれている。2章のルートヴィッヒ二世のところでも少し名前が出たのだが、ゾフィーというのはルートヴィッヒ二世のいとこであるエリザベートの近親にあたる人物である。ルートヴィッヒ二世は、このローエングリンに出てくるエルザとなぞらえて、ゾフィーと接していたといわれている。またローエングリンに関連して、城の中のほかの場所でもローエングリンの彫刻などが飾られている。空想の世界で十分に生きている実感を覚えたかったのかもしれない。もしくはこの時からすでに精神的不調があったとするのならば、自分はすでにローエングリンの世界にいたと思っていたのかもしれない。彼の芸術への愛をこのノイシュヴァンシュタイン城のいたるところから感じることができる。

実際にお城の中を視察した際に「歌人の間」というとても大きな部屋の視察をした。ルートヴィッヒ二世はコンサートホールとして使う考えは一切なかったようで、

儀式のために用いていた。しかし、のちの1933年に初めてコンサートホールとして使われ、毎年宮殿コンサートが開催されている。使用することができない、見学のための観光資源にとどまらず、実際に使用することでさらにその価値を上げ、城のことを知るきっかけの一つになるのではないかと思う。

また城のあちこちに白鳥の絵画や装飾が施されていた。これは清純の象徴であることを表しており、シュヴァンガウの騎士の紋章に由来しているようだ。城のいたるところに白鳥が鎮座していることから、いかに大切に思っていたかがうかがえる。

白鳥の次にルートヴィッヒ二世が好んでいた動物が孔雀である。ノイシュヴァンシュタイン城の化粧室の中で使われている織物には孔雀のモチーフを金の糸で刺繍している紫のビロードが使われている。ルートヴィッヒ二世は日記にもこう記している。

「私を魅了する動物は、ひとつしかない。創造物の中で最も美しい傑作は孔雀である」

いかに孔雀を魅力的に思い、城の中に取り入れようとしたかがわかる一文となっている。

4 総括

ここまで、お城の概要とルートヴィッヒ二世自身について、ノイシュヴァンシュタイン城の内側にある装飾について私自身の考えとともに、考察を深めてきた。ルートヴィッヒ二世の人生は壮絶だったという事

実と彼の「好き」を詰め込んだ城の数々。今回のノイシュヴァンシュタイン城の視察を通して、彼の歴史と考えを少し知ることができたと感じている。今までは何気なく写真を見てきれいだなと感じていただけのノイシュヴァンシュタイン城。歴史的背景やかかわった人物を知ることによってこんなにも見方が変わることに驚いている。もし機会があれば、さらなる知識を付けたうえで、もう一度ノイシュヴァンシュタイン城を訪れたい。その時にどのような印象を自分の中に抱くのだろうか。初めて見た時とは異なる感情を抱けていることを願うと同時に最後に、ルートヴィッヒ二世の言葉の中で私にとって一番印象深い一文を添えて終わりとしたい。

「私は時計のようにわが人生を規制しないなら、孤独に耐えられないであろう。孤独は私に重くのしかかるが、それなしでは過ごせないのだ。」

孤独な人生がさらに孤独になることを表しているこの一文。時計のように縛るものがあるからこそ生きることができる、という彼なりの生き方を表していてとても印象深い一文だと感じた。

今回の視察から学んだことは数えきれないほどある。一つ一つを丁寧に消化して、私自身の記憶と経験へと変えていきたいと考えている。

参考文献：ヴィルヘキム・キーンベルガー社
「ノイシュヴァンシュタイン リンダーホーフ
ヘレンキームゼー 国王ルートヴィッヒ二世の
城と生涯 日本語版」